

田中先生の思い出

佐 藤 友 美

(横浜市立大学大学院生命ナノシステム科学研究科)

田中先生に初めてお会いしたのは、私が大学に入学してすぐのオリエンテーションの時でした。当時、真鍋先生が主任、田中先生が教務をやっていたようで、私たち新入生に向かって自己紹介された後、「今後はこのでこぼこコンビでやっていきます」と仰ったのです。大学に入学したばかりの私にとって、大学の先生というのはどのような方なのかまったく想像できませんでした。むしろ、どちらかという冗談など口にはせず、近寄りがたい存在だと思っていましたが、田中先生のこの一言で緊張がほぐれるとともに、そのような思い込みが崩れ去りました。気さくで親しみやすい田中先生のお人柄は、その後、実習や講義を受けるたびにますます感じることができました。また、田中先生の講義はとてもわかりやすく、板書もきれいで、大きい、見やすい、の3つが揃っていて、時間割がいつも1限であることをのぞけば、私たち学生にとってとても評判の高い講義でした。田中先生の手書きの文字は本当に特徴があり、卒業してからも頭に思い浮かぶ方も多いと思います。

このように人気のある田中先生でしたので、卒業研究の希望者がとても多く、毎年、たくさんの学生が配属になっていました。私は別の研究室に所属していましたが、友人や後輩たちの多くが遺伝研（当時はこのように呼んでいました）に所属しており、大学院生の時も実験の合間にときどき遊びに行っては、いろいろ話をしたり、おいしい料理をいただいたりしたことを覚えています。この流れは卒業してからも続き、遺伝研卒業生による田中先生を囲む会（？）に特別に参加させてもらったりしています。田中先生といえば、「お酒」、と浮かぶ人は多いとは思いますが、飲むほどにどんどん饒舌になり、顔が赤くなっていく田中先生のお話は最後まで楽しく、私にとって楽しみな会の一つです。そして先生はどんなに酔われていても、愚痴などこぼすこともなく、最後まで楽しいお話ばかりでお開きになるところも（むしろ時に楽しすぎる時もありますが）、先生の人気の高い理由の一つだと思います。

学生の際は、田中先生の講義や実習がわかりやすく、よどみなく進行することを当たり前のこととして受けとめていましたが、私自身、縁あって横浜市立大学で学生教育に携わるようになると、別の面から田中先生のすばらしさを感じるようになりました。た

例えば放送大学の実習の時、試料も季節ごとに別の植物を取り上げるなどされていて、田中先生の万全な実習準備や時間配分など、とても勉強になりました。放送大学では、さまざまな受講生の方がいらっしゃいます。毎回、受講生の理解度、実験の進み具合に合わせて実習内容を増減させて時間を調節し、しっかりとまとめの時間を取る。そのさじ加減はとても真似できないような絶妙なものでした。きっちりと時間通りに終了後、今夜はお楽しみがあると仰いながら颯爽と帰られる姿を、いつも羨ましく見送っていました。だいぶ長い間、放送大学の実習をご一緒させていただきましたが、残念ながらいつまでたっても私にはあのようにはいできないだろう、と実感しています。

田中先生と言えばまた、毎朝きっちりと研究室に出勤され、温室のユリに水をやっていたり、様子を見ていたりされていることも印象的でした。それは今に至るまで続いており、朝からこまめに大事な植物の世話をご自身でされている様子は、研究者としてあるべき姿であると思っています。ユリ植えの際も、いつも自ら汗を流して働いていらっしゃいました。田中先生が退職されたら、このお姿を見ることもなくなると思うと寂しい気持ちになりますが、仕事を離れて、ゆっくりとご自分のために時間を使っていただきたいとも思います。

つらつらと思い浮かぶままに書き連ねましたが、田中先生には学生時代から今に至るまで、本当にいろいろとお世話になりました。在学中はもちろんのこと、職を得てからも陰からサポートしてくださり、大学の仕組みがよく分からず右往左往する私にとって、田中先生の存在はとても心強かったです。最後になりましたが、長い間本当にお疲れさまでした。